標註

古今和歌集

下

183
2
176

東京圖書館
和書門
門 類 函 架 號 冊
和歌 一八三 四 一七六 二

倭歌集卷第七

賀歌

標註　ほぎ歌と、よむべし、祝ひ、本、忌事也、神を祭り君を祝ひ吾をいはふ時は皆あ非常(ハレナラヌ)けがーき事を忌故に祝ふと云也ことほぎは言褒(ことほめ)の意にてほめことばなれば祝ふとは本別にて末にては同一意となれり

讀人不知

題なしぞ

我君ぞ千世ぬましませさざれ石乃いもほとなりて苔むすまで

わたづ海ぬ瀕の眞砂をかぞへつゝ君が千とせぬあをかづにせむ

ぬ乃山さしでぬ磯ぬすむ千ぞり君が御代をばやちよとぞなく

わが齢君がやちよにとりそへくとどめたきてぬおもひでにせむ

仁和乃御時、僧正遍昭ぬ、七十ぬ賀給ける時の御哥

三代實錄に仁和元年十二月十八日延僧正(ニ)法印大和尚位遍昭(ヲ)於仁壽殿(ニ)申曲宴(ヲ)遍昭今年始滿七十(ニ)天皇慶賀(ノ)徹夜談賞(シタマフ)太政大臣左右大臣預席(ニ)云云仁和帝は光

孝天皇也

かくしつゝとにも角ゐをながらへく君がやちよに逢よしもがな

仁和乃帝は、みことにおはし座ける時ゐ、御をばの八十賀ゐ、白銀を杖ゐ作れりけるを、そてかの御をばゐ替て、詠る　僧正遍昭

光孝天皇御母は贈皇太后藤原澤子とゆて贈太政大臣緒繼公の御女也其御姉妹なるか但し皇太后の御母なるか古は祖母をゐばとかき父母の兄弟ををべと書てわかつを後世かなみざりになりてうたがはしき也元祖母をゐばと云はれはゝを略きて云兄弟ををべと云は小母の由ときけり

千早振神乃きりけむつくからにちとせはさりをとえぬべらなり

そりかとの乃れはいまうちきみの、四十賀、九條の家ゐてゐける時ゐよめる　在原業平朝臣

太政大臣基經公也貞觀十四年八月二十三日右大臣左大將と成給ふ三十七歳同十七年四十歳此公堀川の殿におはしましける故に堀川の大臣とゆせり此賀は九條の御家にて行はれし也是も公の御家也四十より祝ふ事は藤原の宮より始まれるか懷風藻に五八の年を賀すると云事見えたり其後仁明天皇四十を祝ひ給ふ事續日本紀にみゆ

櫻花ちりかひくもをおいらくれこむといふなるこちまがふりゐ

貞辰親王のをばの、四十賀を大井ゐくゐける日、詠る、紀維濕

貞辰皇子は清和天皇第七の皇子也此御をばゝ御母方なるべしといへり大井は嵯峨の大井河のほとり御伯母の家在しなるべし

かめのをれ山のいと糸をとめてたつる瀧の白玉千世乃かぎりを

貞保親王の、后乃宮の、五十賀、たてまつりける御屏風ゐ、櫻花のちるゐたゐ、人の花乃さる方りけるを、詠る　藤原典風

貞保皇子は清和天皇第五の皇子也后の宮は二條の后寛平三年に此御賀在伊勢集にきさいの宮の五十の賀せさせ給ふ御屏風にとて歌有も同し御賀と見えたり方は即給也賀に屏風をたつるは老人なれば風にあてじとする用意なるべし

いたづらにすぐる月日をおもはえで花をくらす春ぞすくなき

本康親王の、七十賀れ、後の屏風に、詠く書ける　紀貫之

源氏花鳥に八條式部卿本康親王は仁明天皇第五御子母は從四位上滋野温子參議貞主女也とあり

春くればやどにまづさく梅乃花きみが千とせかざしとぞ〻る　素性法師

古しへゐわりきゐらゐゐちゐらゐゐぞもち歳のゐめし君にはゞめむふして思ひおきくかぞふるよろづ世い神ぞゐるらむ我君乃ためつるかめもちとせ乃後いゐらゐくにわかぬ心ゐまゝ拾はてくむ　在原ゐゞもる

藤原三善が、六十賀ゐ、よみける

良峯經也が、四十賀に、娘ゐ替り爲、詠侍ける　そせい法師

從四位下行丹波守貞觀十七年五月十九日卒すと三代實錄に見えたり此人のむすめにかはりてよめるならむ

万代をまゝ川ゐぞ君をいとひつる千とせのこゝのゝにすまむと思へば

尚侍の、右大將藤原朝臣の、四十賀しける時ゐ、四季乃繪ゐける

○滋春ハ大和物語にも出て業平の子なりといへり

後の屏風ゐ、書付さゝけける歌　素性法師

尚侍は内大臣高藤公の第二女にて滿子と申拾遺に三條の尚侍といへるは此人也延喜の帝の御をばにて殊に養ひ奉れる右大將藤原朝臣は泉大將定國公にて此内侍の兄君也此賀は延喜十四年春にて此屏風も帝より調〻て内侍のかみに賜へり躬恒集に云延喜十四年二月十八日おほせによりて奉る泉の大將の四十賀の屏風内より調〻てつかはすに書料の歌といへり四季の繪は源氏物語若菜上にうゝろの屏風四てうは式部卿の宮なむせさせ給ひけるいみじくつくしていしの志きゝなれはめづらゝき泉水瀧などめなれずれもゝろしと云り此度の歌七首に作者をしるさぬは素性に仰付られけるにや勅撰にも家集にも入て明らかなれば名をいれつ

春

かすが野ゐわゝのなゝそつゝよろ川代をいとふ心ゐ神ぞゐるらむ　凡河内とつ〻

山たかゝ雲井に見ゆるさくら花ゐゝろれもきてをらぬ日ぞなき　紀友則

夏

めづらしき聲ならおくに時鳥こゝらはとしをかさねるゝな　みつね

秋

住乃江のまつを秋風ふくからおとさうちうふるたよりにあらなみ　忠峯

千鳥おくさゑ乃川きりたちぬらし山の木ぬれもいろまさりゆく

秋くれどいろもかはらぬときは山よろの紅葉をこの搖ぞかしける　紀貫之

冬

白雪乃ふをしくときはみよし野のやまおろし風おとなぞちりける

春宮乃生れ給へをける時ゐ、參りて詠る　典侍因香朝臣

延喜第二の皇子保明太子也御母は中宮穩子攝政基經公の御女也此皇太子延喜三年に御誕生ま〳〵て四年二月に皇太子に立せ給ひ二十三年三月に薨給ひぬ

こゝねたのき春日の山ゐ出る日ハくもるときおくてらすべらなり

標註古今倭歌集卷第八

離別歌

題ならぎ　在原行平朝臣

立わかれいなとの山乃嶺にたふるまつとしきゝば今ゝへをこむ　よんびとしらぎ

すがるなす秋乃はぎはら朝たちてさびゆく人をいつとゝまたむ

かぎをなき雲井はよろにとかるとゆひとを心ゐをくらさむやも

をけのちふるが、みちはくの佐ゐ能をける時に、母の詠る

守介椽目とて一國四人の官あり其介にまいる也といへり

たらちねのおやゝ乃守をとゝあひろふる心ばゝりハせきなとゝめそ

定辰親子の家おく、藤原きよふが、近江介ゐ能をける時に、馬の鼻むけしゝるに、よゝる　きのをしさだ

いに〜へ旅に行其人の乘れる馬の鼻づらを取て其行方へ向て祝ひごと〜て立せやるが本にて此頃は旅行する人をよびて饗し抔取替し別を、しむ也今別る日の事にはあらすとなむ

けふわかをわすもものふとと思へどもよやふけぬらむ袖の露けさ

おしへまかりける人ゐ、よみくつりハしける

越の國は越前越中越後のみ云にあらずいにしへは加賀能登共越の國といへりこ、は越前なるべしかへる山あれは也

かへるやまわをとハきけど春のすゑ立ひるをなば戀しかるべき　きのつらゆき

人のむまれもなむけゐて、よめる

をしむから戀しき物をあらくをれ立あむのちハなゐでおちせむ

友等の、ひと乃國へまりをけるに、よめる　在原ゐゐはる

ひとのくにとは他國と書て古くは唐國の事に云り是は遣唐使に友等の撰はれし其別成べしといへり

別れてハゐどをへだ円と思へばやかつ見ながらにりねく戀しき

東の方へまかをける人ゐ、遣しける　いりごのあつゆき

あづまは日本武尊東の國を平け給ふ時御妻橘姫の上總の海に沈み給ふをなげきて碓氷の坂にて東をかへり見て吾妻者也と宣ひしを本にて後には相坂の關より東の國をばあづまの國と云其行道を東道と云りこ、は京より東の方の國へ行成べし

おもへども身をしるけねばめに見へぬ心を君ゐたぐへくぞやる

相坂ゐく、人をわかれける時ゐ、よめる　なにもろよろづを

山は近江に屬し山城との境京よりこ、迄送りて別る、處なり古しへ關有し山也旅人はこ、にて道の神へ手向すればたむけ山ともいへり人を別る、と人に別る、と云は別也人の旅行に別る、は人をと云我行時は人にと云古しへより の格也

あふさりけ關しまさしき物あらばあかぎわりる、君をとどめよ

題ゐらず　讀人不知

からころもさ円日ハきりど朝露のおよてしもけばけぬべき物を

常陸へ罷りける時ゐ、藤原公利ゐ、詠く遣しける　罷

あさにげゐんべよきみとしたのまねばおをひゑちぬる草枕なり

紀宗貞が、東へ罷りける時ゐ、人の家に宿を て、曉出さつとて、ま

かを申しけをば、女乃よそていだせりける　よんびとをらぎ

人の家に宿るは方違の爲に宿れる成べし中頃の世に方違迎外に宿りて旅にも立家へも歸る事をする也夫は陰陽師の云天一神と云神天を廻りあるくが其方へ向ひて行かひすれば必ず凶き事有とて他に宿りて方をたがへて行事源氏物語にも多くみゆ

えぞをらぬいまゐ、ろ乃よ命わらば我やとするゝ人やとはぬと

わひしをて侍ける人の、東乃ゝたへまゝりをけるを、送るとて、よ

ゑる　深養父

雲井ゐもかよふ心のれくれねばとかるとひとにゝゆばゝりをあり

友乃、東へまゝりける時ゐ、よめる　良峯のひでをか

白雲れとなさかゐたゐ立をゝりをこゝろをぬさとくだくたびのな

みちのくれ國へ罷をける人ゐ、詠て遣しける　貫之

をら雲のやへにかさなるをちゐてを思ハむ人にゐゝろへだつな

人をわのれける時ゐ、よ乃ける

わゝをてふことは色ゐをわらゐくに心ゐをゝてをびしゝるらむ

わひををりける人の、おしれ國ゐ罷をて、年へて京に詣できて、

又歸りける時ゐ、よめる　凡河内ゝ躬恒

歸る山なにそハ有てゐるゝひをきてもとまらぬゐゐゐゐろ有けれ

おしれ國へまゝをける人ゐ、よゝて門ゝハしゐる

よ所にのゝ戀やわたらむ白山れゆおゝるべくもゐらぬをが身を

音羽山乃をとりゐて、人を別るとく、詠る　はらゆお

れとハやまゐだゝくゐきて郭公きみがわゝををしむべらなり

○兼茂ハ右近中將利基之四男延喜元年參議

○もとのりハ奥義鈔に藏人右衛門尉基範と見え作者部類云平元規左衛門尉叙筑播磨介中興が子五位といへり

○おろめハ大和物語に源の告がむすめ又津國江口の遊女也ともいへり

○實ハ參議源舒の子善朝臣が弟にて右近衛中將といへり

○兼輔ハ右近衛中將利基之六男從三

藤原後蔭が、からをれの使ひに、長月乃晦かたに罷をけるゐ、上れおのこども、酒たうびける序に、詠る　藤原のり孫もち

から物の使とは唐國渤海國等の商人共珍敷物を持渡りて筑紫に舟の着たる事を都へ申せゞ即御使を遣はされて其くさ〳〵の物を改させ給ひてさて都へ渡し奉る事を承る也うへのを子共は春の部に云り

をろともに啼てとどめよきりぎをは秋乃別をしくやいわらぬ　平もとのを

あき霧れとをにたち出てわかをゐば晴ぬ思ひゐこひやをさらむ　おろめ

源の實が、つくしへゆあをむとて、罷りける時ゐ、山崎にく、別をを、しをける所にて、よめる

實は舒之子善朝臣が弟にて右近衛中將といへり筑紫へはかしこによき温泉の有成べし山崎は京の南也

いのちだにあ、ろゐかなふをれあらば何り別のかゐしらまし

山崎より神あびの森まで送りに人をまりて歸をがてにおく別をを、しをるによめる　源さ孫

山崎の西山邊にか、りて向日明神と云有其うしろの方に今かうないの杜と云是也といへりて、にて人　と別る迎よめるなるべし

人やりは道ならあくに大方ハいきうしといひくいざりへをなむ

今ハ是より歸を孫と實がいひける折ゐ詠る　藤原かねもち

ふさハをてきにし心の身ゐしわをば歸るさまにハ道をおられを

藤原のこれをりが武藏はすけにまりをれる時に送りに逢坂を　にちゆ歩

こゆるとてよみゐる

かゆゐえてわりれもゆくか相坂ハ人だのめなるゐゐおろ有けれ

大江千古が越へ罷りけるうまれ餞ゐよめる　藤原兼輔朝臣

君がゆくましの白山おらねどもゆきのまにまゐわとハたづ孫む

位中納言承平三年二月薨す世に堤中納言といへる人也

○幽仙（ゆうせん）、天台宗の僧なるべし仁和寺にも住れけるよしものにみえたり

人の花山おまうでゝ夕さりつかさかへりなむとしれる時およめる　　僧正遍昭

夕暮乃まがきを山とゐえおゝむよるハおえじとやどりとるべく

山おゝ登りて歸を詣きて人に別をれる序おゝ詠る　幽仙法師

山といへるは比叡の山也此頃は日枝の延暦寺を山と云三井の園城寺を寺とのみ云ならへり歸りきてといひながら山の櫻とよめるは幽仙の坊は西坂本などに有つらむといへり

わかれをば山の櫻にまかせてむとめむとめゝハもあれまおまに

雲林院のみこれ舍利會に山おのゝりて歸をけるに櫻乃花のもとにくよめる　　僧正遍昭

比枝の山の舍利會に雲林院の皇子登り給ひてかへりに遍昭と共に幽仙の西坂本の坊に立より給ひし時遍昭幽仙の許にとどまれるにや皇子の別れをとゝめまほしくてよめるといへり舍利會の事は三代實錄貞觀八年六月の所に委し

山風おさくらふきまきゝだれなむもあれもぎれおゝ立とまるべく

事ならば君とまるべく匂はおむのへすハ花乃うきにやハあらぬ　　幽仙法師

仁和帝、乃こにおハしましける時おゝふるの瀧御らむじにおハ

ゐましてゝ歸を賜ひけるに、よめる　　兼藝法師

○兼藝ハ或抄に伊勢少掾古次の子或は大和の城上郡の人といへり

あかぎしくわりるゝ涙たきにそふ水まさるとやゐをもハゝゆらむ

神鳴壺おゝ召たりける日、おほみきなどさうべて、雨のいたう降ければ、夕さり迄侍く能を出侍ける折おゝ、杯をとりて、貫之

大御酒の杯をとりて此歌有は兼覽王へ杯をさすとてうたへる也伊勢物語にも狩して天の川にいたると云意をよみて杯はさせと有と同し風流也

秋もぎ乃花をば雨にぬらせども君をばましてをしとこそおもへ

とよめりける返し　　兼覽王

是も右と同し時の歌なるべし上にも云此神鳴の壺にて歌をえらはせらるゝ時始て其人々をこゝにめして御酒給ひしなるべしといへり

をしむらむ人のおゝろをおらぬまに秋乃時雨と身ぞふりにける

兼覽王ゐ、初く物語して別ゐる時ゐよめる　躬恒

別るゐぞ嬉しくをりるゝとよひよりあひをぬさまに何を繊まし

題おらぎ　讀人しらぎ

わかぎしてわのるゝ袖乃おら玉ハ君がゝたみとつゐをてぞゆく

限なくおをふなみだにそゑちぬる袖ハかをゝぐわむむ日までに

かきくらしことハふらなむ春雨ゐぬれぎぬきせて君をとどめむ

おゐてゆくひとをとどめむ櫻をおいづれを道とまぞふまでちを

志賀の山越ゐていし井れもとにてものいひける人のわゝれけ

るををによめる　内らゆき

結ぶ手れおづくにゐごる山の井乃わかでも人にをかれぬるゝな

道にわへをける人の、くるまに物をいひつきて、別ける所にて、

○中臈呂ハ中務大輔船守が子にて元正天皇の御時留學生となり遣唐使に附て物學ばせに遣されしと

よめる

おさ乃帶の道ハかたのさ別るとも ゆきめぐをてを逢むとぞ思ふ　友則

標註 古今倭歌集卷第九

羇旅歌

もろおしにて月ををくよめる　安倍仲麿

土佐日記に明州の津にてよめる由を委しく書けりけれは日記にゆづる

わまれいらふりさけ見をばかすがなるみゝさ乃山ゐ出し月かも

おきのくにゝながさされける時ゐ船にのをて出さつとて京なる

人のもとにつのハしをる　小野篁朝臣

隱岐は北海の中にあれば道の次序難波より船出して播磨路を經長門豐前の間を廻りて隱岐に至るべし然は難波迄送り來る人に此歌はいひあつらへて京なる人の許にやりたる也篁の流されし事は續日本後紀第七に委敷みゆ

わだの原やそしまかけてこぎいでぬと人にはつげよあまの釣舟　よみびとしらず

題しらず

宮ばしらくけふみられ原いづこ川のハ風さむしところもかせやま

不乃ぼのとあけしれ浦のあさ霧にしまがくれゆく舟をしぞ思ふ

東の方へ、友とする人ひとりふたりいざなひていきあけり、三

河國、八橋と云所に、至をけるに、其川乃邊りに、杜若いと面白

くさけりけるを、乃くに木の蔭にをりゐて杜若といふ五もじを、

句のかみにすへて、旅れ心をよまむとて、詠る　業平

此詞は伊勢物語に委しくいつれも夫にゆずる次の歌も同じ

唐衣きつゝなれにしつましをばるばるきぬる旅をしぞ思ふ

武藏國と、下總國とのの中にある、隅田川の邊りに至をて、都れい

と戀しうおぼえけをば、しばし川の邊りに下居て思ひやれば、

一限りもなく、遠くをきにける哉と、思侘て、ながめ居るに、渡守し

や船にのを、日も暮ぬと云けをば、舟に乗て、渡らむとするに、皆

人物侘しくて、京に思ふ人無しもあらず、さる折ふ、白き鳥の、し

しとあしとのこのき、川の邊りに遊けを、京にハ乃えぬ鳥成けを

ば、皆人乃しらず渡守に、是を何鳥そと問けをば、是なむ都鳥と

云けるを、聞て、よ乃える

名にしたもばいざことといむ都鳥わが思ふ人をありやなしやと

讀人しらず

きたへ行鴈ぞおくなる川をてあしかぎをたらでぞ歸るべらなる

東乃方より、京へまうでくとて、道あく詠る　れ　と

山かくすなる霞ぞうらめしきいづをこやおれさゝひなるらむ

あしれ國へまかをける時、白山を乃く、詠る　みつ　祢

きえもつる時しなけをば白山乃なゐ雪ゐぞゐりける

あづまへまゐける時、道ゐて、よめる　ならの帝

いとによる物ならねくに別路乃ゐ、ろぼろくもおもゑゆるかな

甲斐國へまゐける時、道ゐくよめる　凡河内躬恒

夜を寒みねくる朝霜をさらひつゝ草のまをゑにゐまるたびねぬ

但馬國の湯へ罷ける時に、二見乃浦と云所に泊て、夕さりれか

れいひたうべゐるに、友ゐ有ける人〻歌讀ける、序に詠る　兼輔

但馬の城崎（きのさき）といふ所の湯なるべし二見の浦は播磨也今所の者はうたみと云なせりといへりかれいひは干飯の事也古〜へは旅行人必す干飯を持て所々にて水にほとゝ〜てくふ也今も深き山路行には必是を持といへり

夕づく夜おぼつゐなきを玉くしげふた乃乃浦ゐあけてこそ乃ゑ

惟喬親王の共に、狩ゐ罷ける時に、天川と云所乃、川の邊りゐ下（おり）居て、酒なゝ乃ゝける序に、乃これ云けらく、狩ゐく、天の河原に至ると云心を詠て、盃をさせと云けるは、詠る　業平朝臣

天の川は河内國交野郡にあり共にといふに友なると從ふとふたつありて〜は從也

狩くらしたなゐたつめに宿ゐらむ乃まれがたらに我ゐきにけを

親王此歌を返々誦つゝ、かへしえせをゐけるは、共に侍て

よめる　紀在常

ひとゝせに一度きます君まてばやどゐす人もゐらゞとぞおもふ

朱雀院の、ならに御坐（おほーまし）ける時ゐ、手向山にて詠る、菅原朝臣

ならにゐはーますは御幸也其御供に手向山にてよませ給ふと也萬葉第三に長屋王馬を寧樂山に駐（とどめよめる）作歌「佐保過てならの手向にむくぬさは妹をめかれすゐひ見〜めとぞ」

此たびゐぬさもとをゐへたむけ山紅葉れゐしき神のまゐまに

素性法師

手向にゐそづりれ袖をきるべきにもこゝにゐける神やゐへさむ

○紀有常ハ正四位下名虎之子元慶元年正月從四位下行周防權守紀朝臣有常卒す年六十三性清警有儀望云云三代實錄にみなたり

標註古今和歌集卷第十

物名

もの〻名とよむすべて題を一首の歌の内によめる也

藤原敏行朝臣

うぐひす

あゝろから花乃えだづくにろぼちたゞうぐひすとのゝ鳥れ鳴らむ

ほとゝきす

くべきそどときすぎぬれやまちをびく鳴なる聲の人をとよむる

在原なげもる

う川せゝ

涙乃う川拂ゝきば玉ぞみだれけるひろちば袖にもかなゝるらむ

返し

壬生忠岑

袂よりもあまて玉をつぬきまめやこをなむろれとう川せゝむゝし

よみびとしらず

うめ

あなうめに常あるべくもみえぬかな戀しゝるべき香ハ匂ひつ川

川らめき

かにハざくら

万葉にかには卷つくれる船とよみて今も櫻皮を物に卷或はとぢなどす是を後にはかば櫻と畧きていへり

かつげども涙乃なかゐハさぐられで風ふくごとにうきしづむ玉

すもも乃花　李

今いくか春しなけきばうぐひすもれもながめて思ふべらあり

ふゝやぶ

からもゝれ花　杏

あふからもれもなをころかあしけを別むことをゝ孫て思へば

をゝのえげゝげ

たちもな

あしびき乃山たちもあれゆく雲のやどり定ぬ世にあそわをけれ

をもものを

岡玉の木也是を楢の木とも云つるべみと云子のなる木也其み又玉かゝわ共云古〳〵は玉を寶とゝてたふとめる故にかゝる實有をゞ玉の木といへり今どんくりと云木也

みよしのの吉野乃瀧あうゝひ出るゐのハをか玉のきゆとゝゆらむ

やまがきの木

和名抄に鹿心柿と書てやまがきとよめり且柿小而長也とあれゞ今も見るちいさき澁柿なるといへり

よゝびとしらぬ

秋ハきぬ今やまがきよゝきをぎりす夜な〳〵あかむゝせの寒さに

あふひかつら

葵と桂也賀茂祭に御使のかざーにさすときけり葵斗もかざす桂と二ッかざすを諸かづらと云といへり

かくばりをあふひのまれゝ成人をいこのがつらしと思むざるべき

人めゆゑ後あゐのふひのもるけくばわがつらきにや思ひなさをむ

くたに

僧正遍昭

木丹は梔子花也と書るもくたにのもをはぶきたるなりとくちなゝのみは木の實にては色有物故木丹と云といへり

散ぬれば後ハわくゝになるものを思ひをらぬゆまどふてふゝな

さうび

薔薇也うばらの花共云白きは專藥用にす庭に植てめづるは大かた淺紅の花といへり

川らゆよ

我ハけさうひにぞゝつる花乃色をわだなる物といふべかりけを

をゝなへし

を乃を

白露を玉にぬくとやさゝがゐ乃ゝなにも葉ゐもいとをゝあへし

わさ露をとけうぼちつ月花乃むと今ぞ野やまをみなへしをぬる

朱雀院の女郎花合の時あゝをゝあへしといふ五もゝを、くれか

しらにゝきく、よめる

つらゆよ

をぐら山ゝねたちならしあく鹿のへにけむ秋をゝるひとぞなき

きちかうの花　とものを

あきちかう野はなりにけるを白露のおける草葉もいろかはるを

あをに　よみひとしらず

ふりもてゆくいざ古さとの花をむとあしを匂ひぞうしろめたきける

をうたんの花　とものを

龍膽也和名抄にえやみ草又にがな共云今りんどうと云は唐言の轉せるかといへり

我宿の花ふぢしだくとりうたんのはなけをばやあゝにしもくる

おばな　讀人しらず

あをとゝくたのむぞかさきう月蟬のよをばなしとや思あしてむ

けにごし　やたべの名實

率牛子和名朝顏

うちつけにあしとや花の色ををむたくさら露のそむるばかりを

二條后、春宮の御息所と申ける時あめどにけづり花させりけるを、よませ給ける　文屋やすひで

けづり花は今云つくり花也著はめど萩とて一本より多く莖の生出る故にめどはぎと云といへり其莖に作り花をさして作れる也

花の木あまたあらざらめども咲あけりふぢにしとのゝなる時をかな

あのぶくさ　きのとしさだ

山たかみつゆあらしけふくさとハ匂ひをあへず花ぞちりける

やまし　平あり原ゆき

和名抄毋をやまゝと云といへり

郭公ゝ鳴乃くもあやまちにしあをとハきけど乃るよしもなき

からたき　よみびとしらず

秋の萩に三種有こはぎは木萩にて上にいへり春生出て冬枯るは草萩也此二種はいつこの野山にも生出て此國の種也今一種糸の如くほそくたれて花の色深

き有是は野邊に自ら生るを見すかの唐撫子と云類にて唐人のもて渡りし物故にから萩といふ名はよひたるかといへり

う川せゝらからもき毎あとぞむきど玉乃行へをゝぬぞのなしき　ふりやぶ

かもなぐさ

和名抄に河苔かはなといへり

○紀乳母ハ或抄に陽成天皇の紀朝臣全子源益が母也といへり

○兵衛ハ藤原兼茂之女大和物語に忠房が許に侍りける兵衛と有は是か此下に業平朝臣の家に侍りける女といへるなそらへハ忠房の妹かといへり

○清行ハ三代實錄に大納言阿部朝臣安仁之子なるよしみゆ

ぬばゐまの夢になあかるあぐさまむうつ川あだあもわりぬ心を　たかむとれとしはる

さがりごけ

日蔭といひて白青なる苔の奥山の古木の枝なゝに生たるゝを云俗にさるをかせと云羅也

花乃いろハさだひとさりをとけをども返かへすゝぞ露ちろめける　おがたけ

和名長間笋笋青最晩生味大苦といへり是なるべ〜今は女竹ともしのめ竹とも云也

いのちとて露をたのむあかゝければ物ゝびしらにあくのへれ虫　かげのりれおほきゝ

かもゝけ

和名抄に苦竹かはたけといへる是也呉竹の類は箏秀ぬれば皮脱落るに苦竹の類は皆いつ迄も皮の付て有故に皮竹といへり

さよふけてなかばゝけゆく久ゝゝ乃月ふきかへせわきの山の拂　眞せい法し

わらび

煙ゐちをゆとゐみへぬ草のもをゝきゝわらびとなづけそめけむ　きりめれと

さゝ　まつ　びは　ばせをば

いさゝめにときまつ川まにぞひはへぬる心ばせをば人ゐ乃えつ川　兵衛

なし　なつめ　くるゝ

あぢきなしあげきなつめぞ憂毎にあひくるゝをばすてぬ物ゝら

唐琴といふ所にて春の立ける日詠る　安倍清行朝臣

○經見ハ伊賀國阿保の鄕より出たる事續日本紀延暦三年にみゆ又延喜六年日本紀竟讌歌の作者の中に見たり

○施ハ揚の子と云り源氏にして一字名なるは嵯峨源氏備前の國にある所也

浪の音けさからことにきゝゆるハ春乃ゝらべやあらたまるらむ

いゝがさき　かゝそけおそきみ

蜻蛉日記に石山に參りて舟にて歸るとていか〳〵崎山吹崎など云所を蘆の中よりこぎゆくといへり是によれは近江の打出の濱より勢田の田上あたりまての內にいかがさき山吹の崎と云も在しなるへし

楫おあたる波乃ゝづくを春おきばいゝがさきちる花と乃ぞらむ

からさき　おぼれつゝ乃

この乃かさにいつゝらさきお渡りけむ波ぢハ跡ものこらざりけを

○施ハ揚の子と云り源氏にして一字名なるは嵯峨源氏

伊勢

浪の花れきからさ爰おちをくめりそづけ春とはこのせやなすらむ

かそやこの八　川らゆよ

北野と平野の間を流る〳〵川也古〳〵こゝにて紙をすかせ給へり拾芥抄に紙屋院圖書別所野宮東在云云圖書寮は書物を司どる故に紙すく所をも兼知る也

ぬば玉れとがくろかそやかハるらむかゞ乃のゝげに乃ゆる白雪

よどかと

足引の山べにをれば志らくもれいゝおせよとかもるるときなき

かた野　ゆだそ　ゝ

河內の交野郡山城の境也

夏草れうへ志げきるぬま水のゆくゝされなきをがおゝろかな

この川らのそや　源はどとす

今昔物語に五條西洞院に桂宮と申人おはゝ坐其前に大なる桂の木有故に名付まゐらせたる也云云〳〵の事なるべゝといへり

秋くれど月れかつられそやハなるひゝをを花とちらすばゝりを

百和香

和名抄神傳云淮南王張錦繡之帳燔百和之香漢武內傳云武帝好長生之術求道七

○良香ハ桑原公秋成之子弘仁十三年奏して都氏となりし事文德

實錄に見えたり此人始は都宿禰言道といひしを良香と改其後朝臣の姓を賜へり元慶三年二月文章博士從五位下兼大内記行越前權介朝臣良香卒年四十六と見えたり

月七日帝宮掖之内設座殿上紫羅庭席燔百和香云云唐國に昔有し香也或抄に五月五日に百草を取て合する香也といへるは誤なりといへり

花毎にあり来ちらをし風なきばいくそばくわがうしとりハ思ふ　をげもる

すゑあがし

紙に墨を流して文なせる物なりいまもあり

春がすゑながしかよひぢなりをせば秋くる鴈ハりへらざらまし　凡やこれよしか

をき火

炭をおこしたる火也ひをはぶきてれきとのみもいふ

ながきいづるかさだおゑえぬ涙川おきひむ時やそこハをらきむ　大江千里

ちまき

飯を青き真菰草にてつゝみ黄なる絲を以てまく由なり拾遺集に五月五日ちひさきかざりちまきを山すげの籠に入て「心さし深きみきはにかるこもはちとせのさ月いつかわすれむ」と有も同しかるべけれど是は殊にちひさく作りけむかざり粽といふはから國にならひて五色の糸もて卷ぬらむかし又真名伊勢物語に粧燕尾と書てかざりちまきとよまれたるを思ふに今の如く真菰の末をそろへて打ひらめたるを燕の尾に見なしたる物にやちまきと云名は本は蒋につゝみて上を菊もてまきたるゆゑに云かといへり

のちまきけれくれくおふる苗なれど仇ゐハならぬ頼ゝとぞきく

をを初め、るをはてゐく、ながめをりけて時乃うたよゑと、人のいひけをば、よめる

はなのあかめにあくやとて分ゆけば心ぞともゐちりぬべらなる　僧正聖寶

○聖寶ハ寛平二年に貞觀寺の座主となり延喜二年僧正と成弘法大師三世目の直言宗也

標註古今和歌集卷第十六

哀傷歌

あいじやうのうたこゝの詞にはかなしびうたとゝなふべし

いもうとの身まかりける時に、よみける　小野篁朝臣

なくあめだ雨とふらなむ白川の川水まさりあばかへをくるがに

さきのおほきたいまうちきみを、白川のあたりに、をくりける夜、よめる　素性法師

三代實錄貞觀十四年九月二日太政大臣從一位藤原朝臣良房薨同十月四日贈正一位又以美濃國封之爲美濃公諡忠仁公云々白河のあたりとは愛岩郡の後愛岩墓とゆすもおくりける夜は葬送の夜也

ちの涙おちてぞたきつをちら川をきみが世までの名にとゞめれ

堀川のれはきおほいまうちきゝ、身まかりける時に、ふり草の山におさめくけるのちに、よみける　僧都勝延

○勝延ハ俗姓紀氏承均法師の兄也といへり

閑白太政大臣基經公也堀河の家におはしまし、故に堀川の大臣ゆすと寛平三年正月十三日薨諡曰昭宣公

空蟬をちらをとつをもなくさめつふかくさの山けむりだにたて

かむつけのをゝをを

深草の野へのさくらし心あらばあとしばらくはすみぞめにさけ

藤原敏行朝臣の、身まかりにける時に、よゝくろけ家にかつらはしける　紀友則

ゆくをみゆねでもみえけを大ゝさいうつ蟬のよそ夢にあい有ける

相おもをける人の、身まかりにけをば、詠る　きのつらゆき

夢ところいふべくをけれ世中にうつはある物とおもひけるかも

相知れりける人の、身まかりをける時に、詠る　壬生忠峯

ぬるが内にあるをのをやい夢といもむ墓あき世をを現とハゝを

○閑院ゝ源宗千朝臣の女也

われ乃身まかをける時ゐ、よゑる

せを捨けば淵となりてもよどみける別をとむるゑがらみぞなき

藤原忠房が、昔相ゑをく侍ける人の、身まりをにける時ゐ、とむらひにつゝとすとて、よゑる　閑院

さきだゐぬくひのやちたびかなしきい流るゝ水れのへをとぬ也　つらゆき

紀友則が、みまりをにける時、よめる

わすゑらぬ我身と思へどくれぬまれけふい人ゑそ悲しりをけれ　ゐたゝ孫

時しもわきやゝ人乃わりるべきわるをゝるだゐ悲しき物を　凡河内ゝ川孫

はしがおをひにく、よゑる

父母の喪はれもひといへり

神無月ゑぐれゐぬるゝをみぢ葉ハゐだをび人のたもとゐりけを

ちゝがおをひにく、よめる　ゐだゝ孫

ふぢごろもとづるゝいとハをび人のなゝだの玉れ緒とぞ成ける

思ゐ侍ける年の秋、山寺へ罷をける道にく、詠る　貫之

ゐのさ露乃れくてのやま田かりうめにうき世中をおもひぬるりな

思ゐ侍ける人を、弔にまりをて、よめる　忠峯

すゝ染乃きみがたもとハ雲なれやたえ世なゐだれ雨とのゝふる

女乃親の思にく、山寺ゐ侍けるを、有人の弔つりハせをけをば、返り事によめる　讀人不知

落くぼ物語に大將のめの父の喪に里にゆきてこもりたまふを大將もこもらむとのたまひしを御子などあつかふ人なければこもり給はぬよし有今も云うとの喪はこもる也

あしひきの山べにいまハすゝ染のころもれ袖のひるときをあし

諒闇乃とし、池の不とりれ花をゐく、よめる　篁朝臣

諒闇日本紀にみものおもひとよめり嘉祥三年三月廿一日に仁明天皇崩御也此年なるべし

水ぬ面ゐあづく花の色さやりにも君がみりげりおもゐゐるこのな

深草のみりとり、御國忌の日、よめる　文屋のやすひで

仁明天皇也

草ふりき霞りさゐに影りくしてる日れくれしけふにやいあらぬ

深草り帝の御時ゐ、藏人の頭にく、よるひるなき仕奉けるを、諒闇に成ゐけるを、さらに世ゐをまどらぎして、ひえ乃山に登く、頭おろしてけを、其又の年、こな人御ふくぬぎく、わるハ冠給ハをなど歎けるを聞く、よめる　僧正遍昭

藏人頭は殿上を管領して宮中にてはいはんかたなき官也枕の草子にめでたき物の中に藏人を云にうへのちかくつかはせ給ふさまなど見るにはねたくこそおぼゆれ云々かゝられろしては文德實錄云嘉祥三年三月左兵衛少將從五位上良峰朝臣宗貞出家爲僧宗貞先皇之寵臣也先皇崩後哀慕無已自歸佛理以求報恩

○近院右大臣ハ藤原朝臣良世公也寛平三年任右大臣同八年任左大臣る事扶桑略記に見へたり七年はいまだ右大臣なる時人愍焉

みなひとハ花乃衣になを、ぬありとけれたをとよかもきだゐせよ

河原れれはいまうちきみの、身まりをての秋、かり家れをとりを罷けるゐ、紅葉乃色まだ深くもならざりけるをとて、かり家ゐ、よりくいれたりける　近院の右乃おをいまうち君

拾芥抄云河原院六條坊門南万里小路東八町云々融公寛平七年八月廿五日薨年七十三

打つけにさびしくをあるかをとお葉も主なき宿ハ色ゐりけを

藤原高經朝臣の、身まりをくれ、又のとし乃夏、時鳥のなきけるをき、て、よゑる　ほらゆよ

或抄に寛平五年五月十九日に卒すといへり

ほと、ぎすけさ鳴ゐゐゐおどろけば君ゐりきし時にぞ有ける

櫻を植く有けるに、やうやく花咲ぬべき時ゐ、かのうゑける人

故かくーるされしものなるべし

蕚おけをば、うれ花をゝく、よめる　きのもちゆき

花よりも人ところわだゝ成にけをいづれをさきにこひむとゝ見し

わるし蕚おける人の、家れ梅乃花をゝて、詠る　貫之

色もかをもむかしれこさに匂へどもうゑけむ人乃ゝげぞおひしき

河原の左乃おゝいまうちきみれ、ゝまかをて後、かの家お罷く有けるに、塩釜といふ所のさまをつくれりけるをゝて、よめる

君まさでけむりさえゝし塩がまれ浦さびしくもみえわゐるかな

藤原れとしもとの朝臣乃、右近の中將おてすみ侍ける、さうし乃身まりをて後、人もすまぎ成おけるに、秋の夜更て、もれよりまうできけるついてに、みいをければ、もと有しせむさい、いとゑげくあれさりけるを、乃ゝ、もやくうこに侍けをゝ、むかしを思やりて、よゝける

みもるの乃おをすけ

○有助ハ左衛門の官人なり

右近中將利基は内大臣高藤公の兄中納言兼輔卿の父也中將の住たまふ曹司の今は人すまずなりー也

君が植し一むらすゝき虫乃ゑのゑげき野べとをありにけるかな

これさゝ乃みゑれ、ちゝの侍けむ時お、よめりけむうさぎもと、こひけをば、書て送りけるおくに、詠てかけをける、友則

父のありけむは友則の父の世に侍りけむ時に也或抄に友則が父は有常なりと云へり物に見えたる事にや有常は惟高の皇子のをぢにて太たーく參りたる人なれやさも有べくれぼゆ

事ならばことれもさへをきえゝなむゝれば涙乃たきまさりけを

題ゑらぎ　よみびとしらぎ

なきひとの乃やどにかよハば郭公ゝけて孫お乃ゝをおくとつげなむ

誰乃よと花さけるらむゑら雲乃たゝ間のともやくありゑしものを

式部卿乃ゝこ、閑院の五の乃こゝお住渡りけるを、いくばくもわ

らで、女みあの薨ゐける時ゐ、かのみこれ住ける、帳乃ゐゝさひらの紐に、文をゆひつけたりけるを、取くゝれば、むのしれ手にく、このうたをなむ、かきつけける

或人云式部卿皇子ハ二品敦慶親王也宇多天皇之皇子母ハ贈太后藤原胤子延喜帝之同母弟世に玉光宮と申す好色無双の美男にてまゝませゝと也閑院の五の親王ハいまだ考へずと也かたびらは帷也帳ハかいゝろ也

かぎりのぎにこをを忘れぬ物ゐらば山乃かすゝをわたれとハんよ

男の人れ國ゐ罷けるまに、女俄ゐ病をして、いとよハく成にける時、詠てをきゝ、みまりをにける　讀人不知

人の國とハ他國にて京より外の國を云又夷國をもいへ是はいづれにやしらぬと死に臨みて便りせんよゝなきハ遠き國なるべゝ病は其なやむ事を体にいひ煩ふは何事にもわづらはゝき事に云て身のいたみをわぶるに云

聲をだゐきかでこかる、玉よりもなきとこにねむきみぞ悲しき

病に煩侍ける秋、心地のたゆたりをしげなく、おゐえけをば、よみく

人のをとに、つゝハしける　大江千里

をみぢ葉を風ゐまかせてをるよりもたこのなき物ハいのち成けり

身まかをなむとて、よめる　藤原ときもと

露をなどわだなるものと思ひけむこが身も草にをゝぬたこのりを

やまひして、よたく成ゐける時、よめる　業平朝臣

つひにゆく道とハかゐくきましかど昨日けふとハ思ゐざをしを

甲斐國ゐ、相ゐりて侍ける人訪ハむ迚、まこのりける道なかゐく、俄ゐ病をして、今いまと成にけをば詠く、京ゐもてまこのりて、母ゐ乃せよといひて、人ゐつけ侍ける歌　在原ゐげもる

滋春が母は右大臣良相のむすめ染殿内侍なり此歌やまと物がたりに見えたり

かをそめ乃ゆきこのひぢとぞ思ひこし今ゐかぎりれかどで成けを

標註 古今和歌集卷第十七

雜歌上

雜といふ意は序に春夏秋冬にもいらぬくさ〳〵の歌といへる是なり種〻と書ても又雜の一字をもくさ〳〵とよめり四季に不限旅戀などの別に部を立たる外を雜といふ其中に事にひかれて諸部にわたる事はあるべしくさ〳〵の歌とよむべし俗にいろ〳〵と云に同し

題しらず　讀人しらず

我うへに露そおくなるあまのかはとわたる舟のかいのしづくか

思ふどちまどひせる夜ハ唐ゐしきたゝまくをしき物にぞ有ける

うれしきをなにゐつゝまむから衣袂ゆゑゐゝにたてといたましを

かぎりなき君がためゐとをる花ハ時しもわかぬ物ゐぞありける

むらさきはひとをとゆゑゐゐむさしの草ハみながら哀とぞ見る

えのおとうとをもて侍ける人ゐゝへりきぬをくるとて、よ

みくやをける　なりひらの朝臣

めは業平の妻也れとうとは其妹なり夫を妻にもてる人になりうへのきぬは袍なり著襠の袷衣也といへりたはすの晦日にはるとてやりたる由伊勢物語に哀れにかけり

むらさき乃色とき時ハめもるに野ある草木そこのをぞりける

大納言藤原國常朝臣、宰相より中納言ゐ成ける時ゐ、染ぬうへのきぬにあやを送る迚、詠る　近院右のおほいまうち君

或注云寛平六年五月五日任中納言從三位と

いろなしと人やゝるらむ昔よりふかきこゝろにそめてしをれを

石上並松が、宮仕をせで、石上といふ所に籠侍けるを、俄ゐかうふり賜をそければ、歡云遣迚、詠く遣しける　布留今道

三代實錄に仁和二年正月七日授從七位上石上朝臣並松に從五位下石上は物部氏也遠祖は饒速日命なり石上に有て布留の神寶を司どれり

日乃光やぶしわの孫ばいそのかみふりにしさとに花もさきけり

二條后のまだ、東宮のゝやすむ所と、聞えける時ゐ、大原野にまうでたまひける日、よめる　　業平朝臣

春宮の御息所と申事は春の部の上にいへり大原野春日の社は閑院左大臣冬嗣公の藤氏の后女御達のまうで給ふに便りあらしめ給ふとて勸請ありし也春日は藤氏の祖神

おほはらや小塩の山をけふこそは神代もとおもひいづらめ

五節の舞姫をゝく、よめる　　よしゝ孫のむねさだ

續日本紀天平十五年五月橘諸兄公太上天皇へ傳奏し給ふ詔に天武天皇禮樂なくしては世を治るに事闕たりとて此舞樂を作らせ給ふとあり

○河原左大臣は嵯峨天皇第八子母は大原氏也貞觀十四年任左大臣寛平七年薨す源朝臣融公と申す

あまつゐのせ雲のかよひぢ吹とぢよ少女のすがたしばしとどめむ

五節のわしゐ、かむざしに玉のおちたりけるをゝて、たがならむととふらひて、よめる　　河原の左乃おゝいまうち君

ぬしやたゞとへゞゝ玉いとあくにさらばなべてや哀と思ハむ

寛平御時に、上のさふらひゐ侍けるをのこどもに、銚をもたせて、きさいの宮ゝ御方に、大御酒乃れろしと聞えゐ奉ゐたりけるを、藏人どゝ笑て、銚をお前にもて出ゝ、ともかくもいゝ成ゐけるをば、使の歸きて、さなむ有つるといひければ、藏人のなのにたくりける　　敏行朝臣

大御酒は酒の古語をきゝと云黒酒白酒など云に同しれろしは殘り也聞えには上へ申上る也藏人は女藏人なりこゝは殿上人大みきのれろしを乞に銚をもたせて出したるに其かめの形のよくもあらざるを女藏人共の中にれかしがりてかゝる物いとめづらかに見せ奉らむとて御前に持出て返りごともせず笑ける也此歌主も即殿上人の中にありしなり

玉だれのをがめやいづらことよろぎゝ磯の浪分おきにいでにけゐ

女どもゝ乃ゝくわらひけをば、よゝる　　けんげいゐうし

かたちこそみやまがくれの朽木なゐ心ハゝなになさばおりなむ

方たがへに、人乃家ゐまかれりける時に、主のきぬをきせたりけるを、あしゐに返とて、よみける　きのとも乃ぶ

方たかへの事前にいへり

蟬のもぬけよる乃衣ハうすけれどうつぶがゐくもにゐひぬるこのな

題ゐらず　よ乃びとしらず

れそく出る月ゐをゐるゐな足曳の山れわなたもをしむべらゐり

我こゝろなぐさめかゐねさらしゐやをばすて山ゐくる月をゝて

なりひら乃朝臣

大のたハ月をもめでしこれぞゐのつをきば人のゐいとなるをれ

月面白とて、凡河内躬恒が詣來りけるに、詠る　紀貫之

かつゝれどうとくも有このな月影のいたらぬ里もゐらじと思へば

いけに月の乃えけるを、よめる

ふたつなきものと思しをゝづろこに山のもならでいづる月かげ

題ゐらず　よみびとしらず

ゐまれ川雲のゝをにくもやけをばひかぶとどめず月ぞながるゝ

ゐかぶして月れのくるゝ山もとハゐなたゐをくぞ戀しゐぶける

惟喬のみこれ狩しける、共ゐ罷りて宿りにかへぶく、夜一夜酒

をのゝ、物語しけるゐ、十一日の月を、隠れなむとしける折に、

みこゐひて、内へいりなむとゐけをば、詠侍ける、業平朝臣

ゐかなくにまだきも月乃隠るゝか山のもにげて入ぎもあらなむ

田村帝の御時ゐ、齊院に侍ける慧子のみ子を、母ゐやまち有と

いひて、齊院をかへられむとゐけるを、そのことやゝにければ、

よゑる　ゐ ま 敬 信

文德天皇山城國葛野郡田村に納奉る故に田村の帝と稱奉る慧子は文德天皇

○敬信ハ典侍因香朝臣の母なりといへり

の皇女也母は列子從五位上藤原是雄の女也

大ぞらをてりゆく月しきよけきば雲かくせどもひのをけあくに

よろびとしらぎ

題ふらぎ

いうけかゝふるからをのゝもとがしハもとの心を忘られなくに

いわしへけ野中の清水ぬるけれどもとのこゝろをふる人ぞくむ

古乃ふづけをだまきいやしきをよきもさかりハわをしものなり

今こそわれ我をむかしハをとこ山さゝゆく時もありましものを

世の中にふりぬるをけハつゝのくにのながられ橋と我となりけを

さゝけ葉わ降積雪のうれをおもみをとくだち行ゑがさゝりハも

大あらきけ森のふた草おいぬきばこまをすさめぎかる人もあし

數ふきばとまらぬ物をとしといひて今年ハいあく老ぞふわける

おしてるやなわはのゝ門にやく塩乃からくも我ハ老わけるのな

おいらくのこむとふをせば門さしてあしと答くのハぎらましを

さかさまに年をもゝなむとりもわへぎ過る齢やともにかへると

とりとむるもけわしあらねばとし月を哀わなうと過しつるのな

とどめわへぎむべを年とハいもきけをふのをつれあく過る齢ゝ

鏡山いざたちよりてをくゆかむとしへぬる身ハおいやしぬると

業平朝臣の母けみこ、長岡わ住侍ける時わ、業平宮仕す迚、時ゝ

もえまかをとふらハぎ侍けきば、ふもすばゝりに母のみこ乃

元より、とみの事とて、ふみをもくまうできたり、わけてをれば

言葉ハなくて、有けるうた

母のみこは桓武天皇の皇女伊勢内親王也長岡は山城國乙訓郡也とみの事とは疾(ト)み速(ト)みなどの意にてみはそへし詞也俗に急ぎの事と云ほどの事なり

おいぬきばさらぬ別もわをといへばいよ〳〵乃まくゝしき君哉

なをひらけ朝臣

返し

世中にさらぬ之のをれおくをがなちよをとなげく人のとけさえ

寛平御時、きさいの宮の哥合れうた　在原棟梁

白雪のやへふりしけるかへる山のへすがへすもおいにけるかな

同し御時、うへのさふらひにて、をのこ共にたをき給て、おほこわろび有けるついでに、川ゝうまつれる　敏行朝臣

むほみ遊びは管絃也

おいぬとてなどか我身をせめきけむ老ぎばけふにわいまし物を

よみびとしらず

題しらず

千早ぶるうぢ橋もりなれをしぞあもれとい思ふ年のへぬをば

我乃ても久しくありぬ住乃えのきしれひめまついくをへぬらむ

住のえ乃きしのひめ松人あらばいく世かへしとといましものを

梓ゆゑいそべの小松あが代にゝよろづ世の祈てたねをまきけむ

かくしつゝ世をや川くさむ高砂乃をのへにさてる松ならあくに

あををかををる人わせむたゝさごの松もむのしれ友ならあくに　藤原れき風

わたづみのおき川鹽わひゝうかふ淡の消ぬ物からよる方をあし

之さづ海のかざしにさせる白妙乃涙をてゝへるわいぢをまやま

和田乃原よせくるなゝのをば〳〵もみまくれゝしき玉川島かを

なゝはがた塩みちくらしわまごろをたゝの、島にさづ鳴わたる

貫之が、いづゝの國に侍ける時、やまとよりこえまうできて、よ

みて川ゝ入しける　藤原ぬだふさ

忠房も和泉の國までは事有てきつれどそこまではゆかざりけれべれのがある所よりよみて遣せしなるべし

君をおもをひおき川の瀬わ鳴たづの尋ねくればぞありとだにきく

返し　　にらゆき

おきの川涙さゝしれ濱のもまつのなにこそ君をまちこたへつる

なほもにまかれりける時、よめる

難波がゑおふる玉をこのそうめれわまとそ我いありぬべらなる

相知りける人の、住吉の詣けるに、詠て遣ける　壬生忠峯

住吉とあまいつぐとをながゐすな人をすれぐさおふといふなり

難波へ罷りける時、たゝれの島わて雨に逢て、詠る　貫之

たゝみの、島今大わだとよふ里あり近き昔まではみのわだとよびしとぞ是たみの、わざの語のはぶかれたる成べし今難波とよふ里もそこに遠からずときけり

雨わよをたゝの、島をけふゆけばなにいかくれぬ物わぞ有ける

法皇、わし川においしましたをける日、つるすにたくをといふ事を題わて、よませたまひける

或抄に延喜七年九月に此御幸有て九首の題を各に歌詠せ給ふ友則貫之躬恒是則頼基等也序は貫之書り西川は大井川なり

ゆしたづれゑくる川邊をふく風わよせてかへらぬ浪かとぞ見る

中務の卿この家乃池わ、船を造をて、たろし始て、遊ける日、法皇御覽ぐにたもしましたりけを、ゆふさりつゝ、かへりおもしまさむとおけるをりに、よみて奉りける　伊勢

扶桑略記に延長五年十二月廿七日三品行中務卿敦實親王卒すと見ゆ是ならむ源氏小てふに山の木立中島のわたり色まさる苔のけしきなどわかき人〻のはつかに心もとなく思ふべかめるにからめいたる船つくらせたまひけるいそきさうぞかせ給ひれろしはじめさせ給ふ日はうたづかさの人めしてふながくせらるみこだちかむだちめなどあまた參り給へりと云云

水のうへにうかべる船乃君ならばあゝそとまをといたまし物を

からことゝいふところにて、よめる　眞せい法し

都までひびきのよへるからことい涙のをすけてう捗ぞひきける

布引乃たきゐて、よめる　　在原行平朝臣

ときちらす瀧の白玉ひろひたきてよれうき時のなみだゐぞかる

布引瀧乃本ゐて、人〻集て歌詠ける時に、詠る　　業平朝臣

ぬきゝだる人ころゐるらし白玉のまゐくもちるゝ袖乃せばきに

よし野の瀧を乃ぞく、よめる　　承均法師

たが爲ゐひきてさらせる布なれや世をへてゝれどとる人もなき

題ゐらず　　神たい法師

きよ瀧の瀨せゝゐらいとくりためて山ゐけごろも折くきましを

瀧門ゐ詣でゝ、瀧のもとにて、よめる　　伊勢

ゐちぬゝぬきぬきし人もなきものをゐゐ山姫のぬゝさらすらむ

朱雀院帝、布引の瀧御覽せむ迚、文月のなぬか乃日、御座たりける時ゐ、侍ふ人〻に、歌詠せ給けるゐ、詠る　　橘長盛

○長盛ハ作者部類に長門守五位尾張守秋成子直幹の父なり

ぬしなくてさらせる布をたなばゝにわが心とやけふちかさまし

ひえの山なる、をとハれ瀧をゝて、よめる　　ゐだゝ絲

れちたぎ川瀧のみなかゝ年つもる老ゐけらしなくろきすぢゐし

れゐじたきを、よゐる　　乃つ絲

風ふけどところをさらぬ白雲ハよをへてれつる水ゐぞゐりける

田村の御時ゐ、女ゝうゝさふらひにて、御屏風乃ゐを御覽じけるゐ、ゐきれちたりける所れをしろし、これを題ゐて歌よめと、さふらふ人ゐ仰らきければ　　三條乃町

女房のさふらひは畫盤所也主上の御座後涼殿の東

れもひせく心れ中のたきなきやおゝとハゝれどれとのきこえぬ

屏風のゐなる花を、よゐる　　つらゆき

さき初し時よりのちハうちもへて世ハ春なれやいろれつねなる

○三條町ハ紀静子名虎の女文德天皇に宮仕へ奉りて惟高親王の母也

屏風のゑに、よみあたせてゝきける　坂上是則

かぜてゝすゝ山田のいねのこきあれくなきころ渡る秋のうけをば

註標古今和歌集卷第十八

雜歌下

題しらず　よみびとしらず

世の中は何かつねなるあすのがたきのふは淵ぞけふは瀬になる

いくよしもあらじ我こそなぞもかくあまのかるもに思こだるゝ

鴈乃くる嶺のあさぎりたれぞのみおをひつきせぬ世の中はうさ

然りとてうむかれなくに事しあればまづ歎のきぬわなう世の中

甲斐守に侍ける時、京へ罷登ける人に、遣しける、小野定樹　小野篁朝臣

○貞樹は文德實錄に仁壽二年九月從五位下小野朝臣貞樹爲甲斐守云云

こやこ人いのにとゝはば山さとりみもれぬ雲井にとぶとこたへよ

文屋康秀が、三河、椽に成く、あがたこにいゝ出たゝどやといひやきりける、返事によめる　小野小町

あがた見はいにしへ六年に一度づつ國々の田を班ちかへて作らしめ給ふ其使を班田使と云事のあるよりやがてゐなかの事をさしてあがたとよふこと、なりぬ

詫ぬきば身を浮草は根をたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ

題しらず　よみびとしらず

あもれてふことこそうたて世の中を思はなれぬほだしなりけれ

あもれてふことのもとにをく露は昔をこふるなこだりけり

世の中をうきものつらきをつげあくにまづ知るものは涙なりけり

よの中は夢かうつゝかうつゝとも夢とも知らずありてなけきば

世の中にいづら我身乃有てゐし哀とやいとむあなうとやいとむ

山里ハ物乃さびしき事こそあれ世のうきよりハすみよかりけを

おきたりのそこ

白雲のたえぎたなびく嶺ゐだゐすめばすそぬるよにこそ有けれ

ふるゐいまそち

ゐをにけむきえてもいとへ世の中ハ涙のさもぎに風そしくめる

ろせい

いづくにゐよをばいとむ心こそ野ゐも山にもまどふべらなれ

世の中ハ昔よりやハうゐをけむゐが身ひとりのためゐなれるか

よれゐゐをいとふ山邊乃草木とやゐなうれ花のいろに出ゐけむ

みよしれの山乃あなたゐ宿もがな世のうき時のかくれがにせむ

世ゐふればうさころまさきみよし野の岩乃陰道ふそゐらしてむ

いのならむ岩ゐ乃中にすまばかも世のうき事れきこえゐざらむ

足曳乃山のまにまゐかくれなむうき世のなかハ何るゐひもゐし

よれ中のうけくにあきぬ奥山のこ乃もゐふきるゆきやけなましものゝべ乃よしな

おなじをゐなきうた

よれうきめみえぬ山路へいらむにハ思ふ人ゐろゐだしなりけを

山乃ゐうしれをとへつゐハしける　凡河内凡川

よを捨くやまにいる人山ゐてもなゐうきとよハいづちゆくらむ

物おをひける時、いときなきこををて、よめる

今更ゐ何おひいづらむ竹のこれうきふしをげき世とハしらぎや

題ならぎ　よゑひとしらぎ

よにふきば言乃葉ゐげき呉竹のうきふしごとにうぐひすぞゐく

木ゐもあらぎ草にもあらぬ竹のよれはしゐ我身ハ成ぬべらなり

わが身からうき世の中と歎つゝひとのためさへかおしのるらむ

たきの國ゐ、ながされく侍ける時ゐ、詠る　篁朝臣

思きや鄙のわかれゐおとろへてわまれないたぎいざりせむとハ

田村の御時ゐ、事にわたりて、門乃國のすまと云所に、こもり侍けるに、宮乃内ゐ侍ける人に、遣しける　在原行平朝臣

文德天皇の御時事にあたりてとは勅勘をいへどこれはいさゝかみけしきのあしかりけるをゝばしさけて須磨に籠居られしなるべし罪ありて流されし事文德實錄に見へず此天皇の御在位はわづかに十年が程にて其間官位昇進年〻にこそあらぬとどこほりなく見にたるといへり

邂逅にとふ人あらばすまれ浦ゐもしゐたきつゝわぶととさへよ

左近將監、とけて侍ける時ゐ、女乃とふらひに、おこせたりける返事に、よみく遣しける　小野春風

とけてとは解官とて司を停めらるゝ事也解官に三の樣有一に喪解二に病解三に理解と云也科有て解官するを愛ひと云也

○春風ハ從五位石雄子仁和三年散位從五位上大膳大夫に任せられ同六月攝津守に轉任せらる

○清樹ハ仁和二年二月散位從五位下彈正少弼に任せられしといへり

天びとれたとづれしとぞ今ハ思ふとれり人かと身をたどる世に

つかさとけて侍ける時、よめる　平さだふゝ

憂世ゐハ門させりとも乃えゐくになどり我身ハいでがくにする

ゐをもてぬ命まれまれゐどばりりうきことしげく思ふもがな

みこの宮乃、たちたぎに侍けるを、宮仕つかうまつらぎとて、とけて侍ける時ゐ、よめる　乃やぢろきよき

宮づかへ仕ふまつらずは俗に無奉公と云にれなじ

つくば根乃これもとごとにたちぞよる春のゝ山乃かげを戀ひ門

時成ける人の、俄ゐ時ゐくなりて、歎くをみく、こづからの歎もなく、歡もなき事を思て、よめる　清原ふかやぶ

ひかをなき谷ゐハ春もよろなればさきてとくちるもの思もあし

かつらに侍ける時ゐ、七條中宮、とはせたまへりける、御返事に、

ゐくまつをける

七條中宮温子昭宣公之女寛平九年七月立后昌泰二年七月皇太后今此時は中宮にてゐはしましける時ならむ伊勢の集に此女は是彼いへどきかず宮仕をのみしてけるに時の帝召仕ひ給ひけるようそけしからぬ人のことをきかざりけると心にも親なども思わたりけるうちにはらみにけりさて男みこをぞうみ奉りける我親みづからもうれしと思けりつかふまつりしみやす所も后になり給ひにけりうみたりける男みこは桂の宮と云所におきてみづからは后の宮に侍らひけるに雨のふる日打ながめてゐたりければ后の宮のよみて給へりける「月のうちのかつらの人を思ふとて雨に涙のそひてふるらむ」御かへしとてよめるなり

久のさとなかにおひたるさとなれば光をのみぞたのむべらなる

紀利貞が、阿波介に罷ける時に、うまのはなむけせむとて、けふと云送をりける時ゐ、ゐ、かしと罷歩きて、夜更るまで見えざをければ、遣しける

なりひらは朝臣

今ぞ知るくるしき物と人まちむさとをばかをぎとふべからりけり

惟喬のみこのもとに、まうをかよひけるを、頭おろして、をのといふ所に侍けるに、正月に詣はむとて罷さをけるに、ひえの山乃麓成けをば、雪いと深かりけを、ゐひくかゐむろに、罷いたをくれがみけるに、つれ〳〵として、いと物悲しくて、かへりまうできく、よみて送ける

三代實錄に貞觀十四年七月十一日四品彈正尹惟喬親王病に疫頓に出家沙門と爲る云云此時御齢廿九也小野は山城の愛岩郡也比叡の山の麓と云にもしるし去ひていたれるよしは雪いとふかきになつざひゆくなり

わすれていはもめかとぞ思ふおをひきや雪ふこ分て君を見むとを

深草のさとに住もべりて、京へまうでくとて、うこ成ける人に、よこておくりける

年をへてすみなしさとをいでくいなばいとど深草野とや成なむ

返し

よみびとしらぎ

野とならば鶉となきてとしふへむかりにだにやは君はこざらむ

題しらず

我を君なにはけうらゐ有しかばうきふしをこそ身のわびとなりにき

返し

難波潟恨むべきまもれをゑえずいづこをこそ身のわびとかはなる

今更ゐとふべき人もたもはえずやへむぐらしてかどさせりてへ

友等の久う、罷てゐざりける本に、詠て遣はける、みつ絲

みづけ面ゐおふるさ月の浮草乃うきゐとあれや絲をたえてゐぬ

人をとゞめ、久しうわりけるをりに、わひ恨ければ、よめる

身をすてくゆきやしにけむ思ふよりゐかなるものハ心ありけを

宗岳大頼が、越よりまうで來をける時ゐ、雪の降けるをこて、れ

のが思ハこれ雪の如くなむ、積きるといひける折に、詠る

君がおもひ雪とつもらばたのまれず春より後ハあらじと思へば

宗岳大頼

返し

君をのこおもひゐしおれゐら山ハいつかも雪のきゆるときある

きの貫らゆき

ゐしなりける人に、つかはしける

おもひやるゐしれゐら山ゐらねども一夜も夢ゐゐえぬよぞなき

題しらず

讀人しらず

いざゐゝに我世をへなむすがハらや伏見れ里のあれまくををし

我庵ハみゐ乃やまもと戀しくばとふらひきませすぎたくるかぞ

きせん法し

わが庵ハみやこれたつミをかぞすむよをうぢ山と人をいふなり

よみびとしらず

われにけり哀いくをれ宿なれやすミけむひとのおとづれもせぬ

○宗岳ハ始祖大臣武内宿禰男宗我石川此子孫成べし

ならへまかをける時ゐ、われたる家に、女の琴ひきけるをき、て、よゑていれさりける　良峯むねさだ

詫人のすむべき宿とゑるゐべになげきくは、ることゐ乃ゐぞする

初瀬に詣つる道ゐ、ならの京ゐ宿れりける時、詠る　二　條

人ふるすさとをいとひくましかどもならゐ都もうきなゐりけを　よみびとしらず

題しらず

世の中いづれかさをてわがならむゆきとまるをぞ宿と定むる

逢坂のあらしはかぜいさむけれど行へをらねばとびつゝぞぬる

風乃うへにありかさだめぬ塵の身ハ行へもをらず成ぬべらなり　伊勢

家をうりて、よゑる

わすか川ふちにをゐらぬ我宿もせゐかをりゆくものにぞ有ける

はくしに侍ける時ゐ、罷かよひつゝ、碁うちける人のもとに、京

○二條ハ或抄に源定の孫宿（ヤドル）が女又一説には源の至が女といへり

ゐかへりまうできく、つゝハしける　きのとものを

故郷ハをしことゐもわらずをれのえゐくちし所ぞゐひしかりける

女友等と物語して、別て後に、遣ゐける　みちのく

わかざをし袖乃なかゐやいりにけむ我ゐましひれゐき心ちする

寛平御時ゐ、唐（もろこし）の判官に召をて侍ける時に、東宮れ侍ひにて、をのこどもゐ酒たうべける序ゐ、詠侍ける　藤原忠房

もろこしの判官は遣唐使の判官也遣唐使には大使副使判官主典あり船は四艘にて出たゝすなり

なよ竹のよながきうへにも川霜のおきゐるてものを思ふころかな　よみびとしらず

題しらず

かぜふけばおきゐ川ゐら浪たつた山夜半ゐや君がひとりこゆらむ

たがみそぎゆふつけどりか唐衣たゝさゐやまにをりもへくなく

わすられむ時ゐれべとぞもま千鳥ゆくへもしらぬ跡をとどむる

○みちのくハ橘ずなをが女或抄に橘春なほが女と有

貞觀御時、万葉集い、いつばかをつくれるそと、とハせ給ひければ、讀て奉をける　文屋あをすゑ

貞觀は清和天皇の御時なり

神無月時雨ふりたけるなら乃もれなにおふ宮のふることそこれ

寛平御時、歌奉をけるつゐでに、奉りける　大江千里

あしたづけひとりおくれく鳴あゑい雲の上まできあえ川がなむ

藤原かちをむ

人をれぎおをふ心をもるがすをたちいでく君がめにもみえなむ

歌めしけるときゑ、たてまつりるとくよみて、おくゑかきつけく、

たてまつりをける　伊勢

山川は音ゑ乃みきくをもしぎを身をもやながらをるよしもがな

註 古今和歌集下卷終

標註 古今和歌集跋

吾學のゑ祢なる内藤萬春戸自い家兒等に歌よまは手寄にもがと此古今和歌集乃假名を訂しはたまへ書れとき言よみ人の傳など書入置かれたるを此度或人乃すゝゑゑをて摺卷とハあしつるなり斯くく女子等ゑ歌ををしへむゑハまづ戀れ歌ハ省ける方よゝらむとのゆゆつらひ世ゑをば〳〵ありと聞ゝをゐるよをこいすべて初學の手寄に物をたをばとく暫くあゝに省きそうハ別卷ゑあしはるとそさて紀貫之朝臣が序にをいもれたをばゑ今更ゑいふべくもゆらざれど歌てふをゝハ人ゝよむべきゝをぎありけをそが歌をよみ習むゑハ此和歌集より

世によき物ハ万らさりけをゝかるゝ世にありふれたる
卷ハ万まゝあれど戸自が物せる此卷ハ初學れをれのい
とたよりよきものになむ有けるいで歌をよみ習むと
おもふ人ハ此ゝをりよきもれゝよりてもやく其大むね
をゝをいよ、學ひて此道の奥處を窮むべき事にこそ
明治十あまり七とせなが月十まを四日

八城駒雄

183
2
176

明治十七年六月三日　版權免許
同　十七年九月　出版　定價金三拾錢

標註人　山梨縣平民　内藤萬春　西山梨郡常盤町四番地
出版人　山梨縣平民　内藤傳右衛門　西山梨郡常盤町四番地
印刷　内藤活版所